

Kyoto University Overseas Research  
Report of Asian Non-human Primates,  
4 : 5-17.

- 2) Takenaka, O., Hotta, M., Kawamoto, Y.,  
Suryobroto, B. and Brotoisworo, E. (19  
86) : Origin and evolution of the Su-  
lawesi macaque. II. Complete amino  
acid sequences of seven  $\beta$  chains of  
three molecular species. Kyoto Univer-  
sity Overseas Research Report of Stu-  
dies on Asian Non-human Primates,  
4 : 19-33.

#### 学会発表

- 1) 竹中晃子・竹中 修・高橋健治 (1985) : カ  
ニクイザル・ヘモグロビンの鎖の一次構造。  
第58回日本生化学会大会, 仙台。
- 2) 中島たみ子・宮崎生子・小暮正久・石川 研  
・竹中 修 (1985) : 霊長類のA<sub>B</sub>H抗原と  
糖転移酵素について。第58回日本生化学会大  
会, 仙台。
- 3) 森山昭彦・佐々木實・竹中 修 (1985) : プ  
タ筋ポストプロリンエンドペプチターゼの基  
質特異性とペプチド限定分解への応用。第58  
回日本生化学会大会, 仙台。
- 4) 服部正平・竹中 修・榊 佳之 (1985) : 原  
猿KpnIファミリーのDNA構造。第58回日  
本生化学大会, 仙台。
- 5) 竹中 修・堀田美佳・バンバン・スリョプロ  
ト・エディ・プロトイスウォロ (1985) : ス  
ラウェシマカク, 起源と進化。I 電気泳動法  
によるヘモグロビンの分析。第39回日本人類  
学会, 筑波。
- 6) 浜田 稔・竹中 修・渡辺 毅・バンバン・  
スリョプロト・川本 芳 (1985) : スラウェ  
シマカクの形態学的研究 : 体色の比較。第39  
回日本人類学会大会, 筑波。
- 7) Takahashi, K. and Kageyama, T. (1985)  
: Pepsinogen activation mechanisms,  
Aspartic proteinases workshop, Tokyo.
- 8) 泉山 節, 高橋健治 (1985) : 脊椎動物にお  
けるペプシノーゲン群酵素の分子進化。第44  
回日本生化学会中部支部例会, 津。
- 9) 泉山 節, 高橋健治 (1985) : ペプシノーゲ  
ンの活性化一ペプスタチンとの相互作用。第

58回日本生化学会大会, 仙台。

- 10) Nakamura, S. (1985) : A coupled amido-  
lytic assay for leukocyte thromboplastin  
(tissue factor) using a fluogenic subst-  
rate, BOC-VAL-PRO-ARG-MCA.  
10th International Congress on Throm-  
bosis and Haemostasis, San Diego, USA.  
Thromb. Haemost., 54 : 199.
- 11) 中村 伸 (1985) : 単球・マクロファージ  
tissue factorアポタンパク質の精製と諸性質。  
第58回日本生化学会 (東京)。生化学, 57(8)  
: 1110.
- 12) 中村 伸, 鈴木幸雄, 原田孝之, 森川 茂  
(1985) : ヒト悪性リンパ腫および白血病由  
来の培養細胞株におけるTissue Factor産生  
能の比較。第8回日本血栓止血学会 (岐阜),  
抄録集 : 134.
- 13) 中村 伸 (1986) : 活性化単球・マクロファ  
ージTissue factor : そのアポタンパク質の  
精製と性状。日本薬学会第106年会 (東京),  
要旨集 : 253.
- 14) 浅岡一雄, 田之倉優, 高橋健治 (1985) : サ  
ル骨格筋パルプアルブミンの精製および分子  
性状。第58回日本生化学会大会, 仙台。
- 15) 佐々木卓治, 田之倉優, 浅岡一雄 (1985) :  
ウシガエルパルプアルブミンの全一次構造。  
第58回日本生化学会大会, 仙台。
- 16) 村山裕一・桜山のり子・羽柴克子・野口淳夫  
・深尾 立・石田貴文・山本興太郎・竹中  
修 (1985) : ニホンザルT細胞抗原を認識す  
るモノクローナル抗体。第15回日本免疫学会,  
福岡。

#### 系統研究部門

江原昭善・野上裕生・相見 満・瀬戸口烈司・  
松本 眞<sup>1)</sup>

#### 研究概要

- 1) 霊長類各分類群の比較形態学的研究  
江原昭善  
1. ヒトおよび霊長類の下顎骨の機能的・形  
態学的研究。

---

1) 研修員

2. ヒトおよび霊長類各分類群における頭蓋底部と posture の関連。
- 2) エチオピアにおける化石霊長類および化石人類の研究  
江原昭善
- 3) 東海地方先史遺跡出土人骨・動物骨の研究  
江原昭善・相見満・松本眞・木下實
- 4) 東海洞窟遺跡の人類学的、先史学的研究  
江原昭善・相見満・松本眞・木下實
- 5) 霊長類の歯の組織学的研究  
野上裕生
- 6) 南アメリカの第三紀の地史学的研究  
野上裕生
- 7) ジャバにおける第四紀哺乳類の研究  
相見 満
- 8) スマトラにおける霊長類の形態学的研究  
相見 満・松本 眞
- 9) 第三紀食虫類・原猿類および有袋類の研究
  1. 南米出土化石について  
瀬戸口烈司・名取眞人
  2. 南米大陸とヨーロッパ大陸出土の第三紀食虫類化石の対比

## 論 文

- 1) Nogami, S. and Natori, M. (1986): Fine structure of the dental enamel in the family Callitrichidae. *Primates*, 27 : (2)
- 2) Aimi, M. and Aziz, F. (1985): Vertebrate fossils from the Sangiran dome, Mojokerto, Trinil and Sambungmacan areas. in *Quaternary geology of the hominid fossil bearing formations in Java.* (Watanabe, N. and Kadar, D. eds.). Geol. Res. Development Centre, Bandung, Spec. Publ. no. 4: 155-197.
- 3) 瀬戸口烈司 (1985): 分子変化率は一定か—古生物学からの分子時計への疑問—. 人類誌, 93 : 287-301.
- 4) Setoguchi, T. (1985): *Kondous laventicus*, A new ceboid primate from the Miocene of the La Venta, Colombia, South America. *Folia Primatol.*, 44 : 96-101.
- 5) Setoguchi, T., Shigehara, N. and Cadena,

- A. (1985): *Kondous un nuevo primate ceboide de el Mioceno de La Venta, Colombia.* Kyoto Univ. Overseas Res. Rep. New World Monkeys, 5 : 1-5.
- 6) Setoguchi, T. and Rosenberger, A. L. (1985): Some new ceboid primates from the La Venta, Miocene of Colombia. *Memorias : VI Congreso Latinoamericano de Geologia.* Tomo 1 (J. Valdiri W., Ed.): 287-298.
- 7) Setoguchi, T. and Rosenberger, A.L. (1985): Miocene marmosets: First fossil evidence. *Intl. J. Primatol.*, 6: 615-625.
- 8) 瀬戸口烈司 (1985): 食虫類モグラ科 2種の第1小白歯の交換。歯基礎誌, 27 : 828-833. (花村 肇と共著)
- 9) 瀬戸口烈司 (1986): 分子進化の速度は一定か? 科学, 56 : 240-243.

## 総説・報告

- 1) 江原昭善 (1985): 霊長類研究の歴史。霊長類をどう理解するか。霊長類の内臓諸器官。霊長類の起源と系統。霊長類の分類。江原・大沢・河合・近藤編 “霊長類学入門”, 1~67. 岩波書店。
- 2) 江原昭善 (1985): 化石からみた人類系統論。“遺伝” 39 : 4-9. 裳華房。
- 3) 江原昭善 (1985): 人間生活の将来と体育・スポーツの役割。日本体育学会第36回大会シンポジウム。日本体育学会特別シンポジウム。p. 5.
- 4) 江原昭善・松本 眞・木下 實 (1985): 炭焼平第 38・39号墳出土の人骨について。炭焼平第 37・38・39号墳発掘調査報告書。愛知県宝飯郡一宮町教育委員会。
- 5) 江原昭善・松本 眞・木下 實 (1985): 松崎貝塚出土の人骨について。松崎貝塚第2次発掘調査報告書。愛知県東海市教育委員会。
- 6) 江原昭善・松本 眞・木下 實 (1985): 椿洞2号墳出土の人骨について。岐阜市教育委員会。
- 7) 江原昭善・松本 眞・木下 實 (1986): 朝日西遺跡出土の人骨および犬骨について。愛知県教育委員会。
- 8) 江原昭善・松本 眞・木下 實 (1986): 根

方第二岩陰遺跡出土の頭骨について。京都大学霊長類研究所。

- 9) 野上裕生 (1985) : サルの歯とりん灰石。モンキー, 29(201, 202) : 35-37。
- 10) 相見 満 (1985) : 「ヤクシマザル」か「ヤクザル」か。モンキー, 28 ( 3, 4, 5 ) : 45。
- 11) 相見 満 (1985) : 「ニホンザルの学名」その後。モンキー, 28 (6) : 24-26。
- 12) 松本 眞・相見 満 (1985) : コノハザル (リーフモンキー) のプロポーシオンについて。モンキー, 29 ( 1, 2 ) : 38-41。
- 13) 松本 眞 (1985) : 北モンゴル出土の化石はコロプスモンキーのものか? モンキー, 29 ( 1, 2 ) : 41。
- 14) 松本 眞 (1985) : 大後頭孔はどのように動いたか。季刊人類学。16 : 29-43。

#### 学会発表

- 1) 江原昭善・松本 眞・木下 實 (1985) : 朝日西遺跡の人骨および犬骨出土状況について。第39回日本人類学会。日本民族学会連合会。
- 2) 相見 満 (1985) : コノハザルの分布の展開—スマトラの例。第39回日本人類学会。日本民族学会連合大会。
- 3) Setoguchi, T. and Rosenberger, A.L. (1985) : Some new ceboid primates from the La Venta, Miocene of Colombia. VI Congreso Latinoamericano de Geologia, Bogota, Colombia, S.A.
- 4) 瀬戸口烈司 (1985) : 根井の式の分子時計としての有効性。第39回日本人類学会・日本民族学会連合大会。
- 5) Rosenberger, A.L. and Setoguchi, T. (1986) : Fossil marmosets ... and more ... from the La Venta Miocene of Colombia. 55th Annual Meeting of the American Association of Physical Anthropologists, Albuquerque, New Mexico, USA.
- 6) 松本 眞 (1985) : マンドリルの突顎と分類上の意義。第39回日本人類学会。日本民族学会連合大会。

#### ニホンザル野外観察施設

岩本光雄 (施設長・兼) ・東 滋・渡辺邦夫

本施設の運営は上記3教官のほか、川村俊蔵・和田一雄・鈴木 晃によって進められた。昭和60年度の各ステーション関係の状況は次の通りである。

#### 1. 幸島観察所

今年度は五百部裕による「ニホンザル幸島群におけるメスの社会関係についての研究」、室山泰之による「ニホンザルのグルーミング行動に関する社会生態学的研究」、樋口義治による野外でのオペラント学習実験などが行われた。また特定研究「生物の適応戦略の一環として、イモ洗いなどの文化的行動の解析 (河合雅雄, 渡辺邦夫, 霊長研; 樋口義治, 愛知大) や第三者による争いへの介入・援護といった利他的行動の実態 (渡辺邦夫) などの研究が行われた。昭和60年度に島を訪れた研究者は延339人, その他に大学や報道機関等の関係者の訪問が延186人にのぼる。昭和61年3月末日現在, 島内のサルの個体数は主群74頭, マキ群12頭, ハナレザル8頭の計94頭であった。

#### 2. 下北研究林

M群について非積雪期の長期連続追跡が試みられた。まず4~6月, 岡野美佐夫 (北大・文) が, 社会生態の研究を行い, この群れの行動域が大畑川流域におよび40kmを越すことを確かめた。11~12月綿貫 豊・中山裕理が, 冬ごし前の採食生態の研究を行った。12月と3月に西北部の地域個体群のセンサスをめざした調査, 1月にM群と分裂群A<sub>RA</sub>の遊動の同時追跡調査が試みられた。これらの結果, 過去10年余の間「択伐」あるいは小面積皆伐が行動域内で進められたI, Zの両群では, 1982年以後個体数が減少しており, (Z : 63→84, I : 59→61→40) これらの群れでは1983~4年の厳しい冬に高率の死亡が発生したと推測される。

生息環境評価の側面では, 11月に荻野和彦, 二宮生夫 (愛媛大・農) によりヒバ林施業跡地永久プロットでの最新の調査 (10年目), また9~11月に森 治 (大畑小) ・和田 久 (大湊小) らがリタートラップによる果実生産量の測定 (初年度) を行った。

#### 3. 上信越研究林

横湯川流域の植生とseed trap法による果実生産量の調査 (小見山章, 岐阜大), 志賀C群の生態, 行動調査 (陸 斉ら, 東京農工大), 志賀A<sub>2</sub>群の生態調査 (長谷川寿一, 東大) が, ひきつづき行われた。山本教雄 (志賀高原野外博物館),